

【コメント 3】

ひろい のぶこ HIROI Nobuko

京都市立芸術大学美術学部

ノーマ・レスピシオ先生がテキスタイルの分野で、あえて西陣の現況をテーマに取り上げられた事を私は大変喜ばしいことと思います。西陣には長い歴史があると同時に多くの問題点があるのも事実であり、これらに対しレスピシオ先生が果敢に調査され、有効な手立てを指摘されました。先生が挙げられた問題に関して、私も感じるところが多いです。西陣の話に入る前に、私の立場、位置について述べさせてください。

私は京都市立芸術大学の工芸科染織専攻で、織りを教えております。この小さなそして日本で一番古い美術学校は明治13年に京都府画学校として設立され、そこでふだんは染めたり織ったりという実制作の場で学生と接しております。

大学の成り立ちの背景には東京遷都があり、京都の地場産業による後押しが大きかったと思われます。また染織科は、染めの世界から芸術家へ脱却しようされた小合友之助・稻垣稔次郎両先生が先達でした。そして実際に、お二人は軽々と超えていかれたと思います。

私自身は、1970年代の大学紛争を受けて大学の教育システムが一新され、美術、デザイン、工芸という3科が合同で共通の基礎授業を、入学した1年目に半年または1年かけて行うことになった、その実験的教育のスタートの時期に入学しました。そんなわけで、大学で最初に受けた教育は染織や工芸からではなく、いわゆる「創造」の基盤になるものでした。

当時陶磁器の教授に走泥社の八木一夫先生がおられ、工芸科全体に大きな影響を与えておられました。また織物の指導は夫人の高木敏子先生でした。

学生時代から、豊かな染織文化をたずねて、沖縄をはじめインド・ネパールなどへ調査に出かけるようになりました。一方で個展を中心に制作活動を続け、大学を離れてからちょうど10年後に、大学へ戻ってまいりました。その間も含めてほぼ20年間、日本列島と韓国、中国、フィリピン等の樹木や草の纖維いわゆる木綿以前の織物を調査し、1999年に共著で『織物の原風景—樹皮と草皮の布と機—』として出版いたしました。

その内容は、京都では知ることのできなかった、地方でめんめんと自給的に続けられてきたな木綿以前の織物の調査研究です。日本の高度経済成長を背景に、それらの実態をほとんど明らかにされないまま、打ち捨てられていた山村や僻地の「布」の製作工程を学びました。おばあさん達から直接手ほどきを受けながら、実際に手を動かすことではじめて理解できることができほど多いことかを身をもって知りました。地域の自然環境、生業との関連や経済的背景なども含めて、織りの作業を手がかりにして、日本列島とその周辺の人々の暮らしをいくらか知りえたように思います。

そして何よりも、繊維植物の素材と工程や、それらの道具との関連が予想以上に密接であり必然であるかを、言わば「発見」しました。

こうした一連の調査と私の創作の間の関連性というものは、これまで皆無だと考えていました。あるいはなるべく距離をおこうとも思っていました。例えば、私が作品に用いていたのは絹や麻などの繊維と、それ以外にも毛皮、木、針金、ガラスや有刺鉄線、石などさまざまでしたし、技法も各種の織りや編み、組み、フェルトや紙、縫い、スクラッチ、ドローイング、インスタレーションなどイメージにそって自由に選んできました。

一方、そのような創作活動を続ける自分の大学での位置づけが「工芸科染織専攻」であることに対して、いつも何らかの違和を感じていました。こうした経緯もあり、この研究会のお話を西島前学長からうかがった時、参加させていただこうと考えました。

何より、「工芸の何たるか」という大きな問い合わせ一瞬にして氷解できるだろうと思ったからです。しかし、それは一筋縄ではいかないことがあることが、明らかになりました。研究会での発表などから、明治期になって工芸という概念が西洋から持ち込まれたことによって、美術と工芸に分離されたことなどの一連の事情を知り、私が抱いてきた個人的な混乱が単に一人の問題ではないということ、そしてこれは明治維新から日本が抱え込んでいた文化の混沌であったのだと合点がいきました。良く言えば、「工芸」として括られたフィールドの持つ多義性や多様性です。

今回取り上げられた西陣において明らかなように、今日は社会の大変革の時期にあると強く感じています。広い意味での「物の手触り」が急速に平板になってきており、とりわけ「手仕事」が目前で崩壊している事実については、すでに多くの人が指摘している通りです。

京都市立の芸術大学として、染織産業や経済との関わりは重要です。テキスタイルに携わろうとする学生たちや若い人の将来に関わるだけではなく、これまで磨かれてきた高度なテクニック、ノウハウの蓄積であるこうした「技」が日毎失われていくのは大きな損失です。おそらくここには、まだ手つかずの無数の「ものづくりのヒント」が埋もれているであろうと考えます。

つい2週間ほど前に沖縄の南風原公民館で「染織の素材展」と銘打った催しがあり、出かけてきました。これまで未公開であった第二次大戦前後のきわめて上質の沖縄染織の個人コレクションがはじめて百点以上展示され、さまざまなワークショップと講演が4日間続きました。その間、会場に足を運んだ人は延べ約2000人、そのうち県外からの参加者が半数であったそうです。しかもその場に会した人も物も、アジアへの広がりを持っていました。またプロフェッショナルとアマチュアを問わず、染織に強い興味関心のある人のどれほど多いことかを強く実感してきました。

今後は、西陣に限らず、これまでの経済システムではなくて、利益の配分を見直し、作り手にきちんと還元することが重要であると考えます。それを実践すれば、国内で関連の

技術後継者が育つ可能性が出てくると思います。しかし、そのために公私両面での教育と支援は欠かせません。世界的な視野で眺めて、染織文化がどれほど美しく価値のある仕事であるかを、日本各地や海外から訪れる人々に理解してもらい、ひいては質の高い物作りを支え、使う文化を育てるために、京都にテキスタイルの美術館がほしいと願っています。

西陣は遠い過去から何世紀にもわたって、京都以外から人々が流入し、染織業に従事してきました。これから、より門戸を開いて次世代に受け渡さなければならないし、何と言っても西陣自身が変わっていかざるを得ないでしょう。少数とはいえ、何人かの若い世代が、果敢に家業を引き継ごうとしています。また京都以外の出身者が織物に魅せられて京都に定着し、新しい動きを見せてています。それは全体から見れば小さな変化ですが、「手を使うこと」を大切に思い、染めや織りを愛する人が必ず続けてくれるものと思っています。「作ることは喜びである」という、初心に戻ることが今とても大切だと思います。